

# 荻生徂徠の『政談』と『鈴録』について

——武士土着論とその背景にある危機意識——

許 家 晟

## 一、はじめに

荻生徂徠が先王の道に絶対の価値を置くことは言うまでもない。

徂徠学の成立を意味する『弁道』において、徂徠は「道」について次のように述べている。

それ道は、先王の道なり。

「夫道、先王之道也。」

先王の道は、天下を安んずる道なり。

「先王之道、安天下之道也。」

このように、彼にとって、「道」は「先王の道」にほかならない。

そして、彼が定義した先王の道とは「天下を安んずる道」であり、

さらにこの「先王之道、安天下之道也」という言葉は『弁道』に合

計八回も出てきて、『徂徠先生答問書』などにも、枚挙する違もないぐらい、彼が頻りに使っている言葉である。このことが彼にとつ

てどれだけ重要なのかは言わずともわかるであろう。また、安天下を現代の言葉に置き換えるとすれば、「政治的なもの」にあたり、このいわゆる「政治の発見」ということは、丸山眞男以来の定説<sup>[1]</sup>である。

「先王の道」を解明するためには言語の壁を越えなければならぬ。そのため「古文辞学」の方法を打ち立てる必要があったが、しかし、それは「先王の道」そのものではない。また『弁道』『弁名』を完成し、先王の道を明らかにしたが、それだけでは、先王の道を継承し、実践したものとは言えない。二弁の成立後、彼の関心はすべて現実問題、すなわちいかにして天下を治めるのかに集中し、その後著作の殆どが「先王の道」の黙々たる実践である<sup>[2]</sup>。このことを端的に表していたのは、次の彼の言葉である。

孔子の道は先王の道なり。先王の道は天下を安んずる道なり。

孔子は、平生、東周をなさんと欲す。その弟子を教育し、おのおのその材を成さしむるは、まさに以てこれを用ひんとするな

り。そのつひに位を得ざるに及んで、しかるのち六経を脩めて以てこれを伝ふ。

「孔子之道、先王之道也。先王之道、安天下之道也。孔子平生欲為東周。其教育弟子、使各成其材、將以用之也。及其終不得位、而後脩六經以伝之。」  
 (『弁道』2)

荻生徂徠の政治思想と言えば、誰もが真っ先に『政談』を思い浮かべるであろう。彼が晩年に、八代將軍徳川吉宗の下問に応じて、改革の意見書として『政談』を献上したことは、ほぼ周知に属する事柄である。この著作は、松村宏氏のいう「幕府体制の診断と処方<sup>3)</sup>」を全面的に論究し、幕政権力のための職業的政治論を展開して成った<sup>3)</sup>ものであり、まさに徂徠の政治思想の集大成と言えよう。

一方、徂徠には、その『政談』とほぼ同時期に完成されたと思われる、『鈴録』というもう一つの著作がある。この『鈴録』は基本的に軍事関係の著作ではあるが、一読すれば、この二つの著作が、性格上非常に類似していることに、すぐに気付くのである。両方も幕府政権の維持改革、もっと言えば、いかにして天下を治めるかについてのものである。結論からいうと、「先王の道」の実践、つまり徂徠の社会構想の集大成はこの『政談』と『鈴録』の二著である。そして、この二著が共通する最大のキーワードは、本稿の取り上げるところの武士土着論である。

『政談』についての研究はかなり積み重ねられているが、管見の及ぶところ、『鈴録』についての研究はあまり見られない<sup>4)</sup>。さらに

この二つの著作を同時に扱い、分析をする研究は、まだ行われていないようである。

また、『政談』においても、その研究の殆どは、依然として「実証主義と社会構成体史」という近代的枠組に強く規定され、そこからこぼれ落ちた価値は通常省みられない<sup>6)</sup>ものである。筆者はこの所謂「近代のまなざし」に与せず、本稿では、対象とするものを近代的価値観の枠組から解放した上で、その全体像の一角を探り、二つの著作の関連性を明らかにしつつ、徂徠の政治思想の構想とその現実性について、考察と再検討を加えたい。

本稿において、徂徠著書の引用は、以下の通りである。『政談』は東洋文庫(平凡社)、『鈴録』は荻生徂徠全集6(河出書房新社)、『弁道』『弁名』『太平策』は『荻生徂徠』(『日本思想大系』三六、岩波書店)、『論語徴』『徂徠先生答問書』は『荻生徂徠全集』(みすず書房、一九七三〜八七)。

なお、字体は新漢字で統一した。

### 一、『政談』と『鈴録』の成書年代および作成目的

『政談』の精確な成書年代については、平石直昭氏の緻密な考証によって、享保十年から執筆を開始し、「享保十二年春中に提出されてきた」ものであることは、ほぼ定説となっている<sup>7)</sup>。

一方、『鈴録』の精確な執筆年月については、今のところ考証す

術がないが、徂徠自身が書いた序文によれば、『鈴録』に序を付したのは「享保十二年丁未正月」であり、『政談』献上の時期とほぼ重なっていたのである。

これをもって平石氏は、両著のことについて次のように論じていた。「本書（『鈴録』のこと）巻一「制賦」の内容は「政談」巻一、二で述べられている主要思想と重なる面が大きい。しかし後者には軍制改革やそれに関連する諸テーゼは殆ど展開されておらず、その面を扱ったのが本書だといえよう。両著述の成稿がほぼ同時期であるのは偶然とは思われない<sup>8)</sup>。しかし平石氏の論はここで途絶えてしまい、具体的な検証はなされていなかった。本稿では、平石氏のこの見立てを踏まえた上で、より踏み込んだ検証を進みたい。

『政談』が吉宗の命令を受けて、改革の意見書として作ったものであることは、言うまでもないが、『鈴録』の作成目的はどうだろうか。そもそも、儒者を自認する徂徠がなぜそこまで兵学にこだわるのか。

「道」の一文字は、儒教にとって極めて重要な意味をもつ。子安宣邦氏は、彼の『事件』としての『徂徠学』の中でこう述べた。「儒家が道という名辞に対することの意味は、神道家が「神」という名辞に対することと同じであるといえるかもしれない。神という名辞をめぐる問題に、一つの神道的神学を構成することで答えるというのも、それへの対応としてありうるだろう<sup>9)</sup>」。言い換えれば、儒

者の「道」に対するとらえ方が、その人の儒学に対する認識を顕し、構成することになるということであるが、徂徠の場合はどうだろうか。『弁道』には、次の言葉が記されている。

道は統名なり。礼楽刑政凡そ先王の建つる所の者を挙げて、合せてこれに命くるなり。

〔道者統名也。挙礼楽刑政凡先王所建者。合而命之也。〕

（『弁道』3）

これは、徂徠学において「先王の道」の内容が「礼楽刑政」であるそれぞれ「道」を構成する具体的なものであることを示している。そして、そこに軍事行動も含まれているのである。

「礼に立つ」と云ふ者は、凡そ上は朝廷宗廟より、下は郷党朋友に至り、外は則ち聘会軍旅蒐狩、内は則ち「閨門の中」、以て言語容貌の間、器服制度の際に至るまで、先王皆之が礼を立て、以て「徳の則」と為し、執りて之を守る。

〔立礼於云者、凡上自朝廷宗廟、下至郷党朋友、外則聘会軍旅蒐狩、内則閨門之中、以至言語容貌之間、器服制度之際、先王皆立之礼、以為徳之則、執而守之。〕（『論語徴』丁）

この「軍旅蒐狩<sup>10)</sup>」とは、言うまでもなく軍事行動のことを指す。そして、『弁名』の中では、学と道との関係を次のように規定している。

学なる者は、先王の道を学ぶを謂ふなり。

〔学者、謂学先王之道也。〕

（『弁名』学一）

つまり、学とは先王の道を学ぶことであり、同時にその先王の道は「礼楽刑政」であり、その中に軍事行動のことも含まれているから、学者もそれを知らなければならぬのである。

また『鈴録』の冒頭においては、『春秋左氏傳』成公十三年の言葉を用いている。

古に祀と戎とは国の大事なりともいひ、周官の制度にも六卿を以て国の政務を司る事なるに、出征の時は六卿則六軍の大將たりといへり。  
（『鈴録』序）

彼は『左傳』と『周礼』に基づいて、引き続きその重要性を説く。聖人の道は治国の道にて、軍旅は治国の一大事なり。其国の興るもほろふるも此一挙にあることなれば、聖人の道を学ふ人は是を疎かに心得べからず。  
（『鈴録』序）

「聖人の道を学ふ人」は必ず「軍旅」のことも知らねばならない。しかしながら、後世の学者たちはその道から外れてしまっている。『弁名』において、すでにこの立場を見出すことができる。

戦国よりして後、文武其の術を殊にし、秦漢よりして後、文武其の官を殊にし、唐宋よりして後、又た其の政を殊にす。故に今の学者は習ひて以て常と為し、武は逢掖の事に非ずと謂ひて、古意隠れたり。

「戦国而後文武殊其術、秦漢而後文武殊其官、唐宋而後又殊其政。故今学者習以為常、謂武非逢掖之事、而古意隠矣。」

（『弁名』勇武剛強毅一）

中国もその戦国時代以降、すでに文、武が二分された。『鈴録』は軍事専門書の立場から、もつと厳しい批判を与えた。

上古は右にいへることく文武二つにわかれされとも、後世学問衰へて聖人の道を学ふ輩、軍旅を軽しむる事甚誤れる事なり。殊に宋儒の学問に至りて、王道の師といふ事を説て兵学に計策をいひたるを、古湯武の軍にはなき事の様にいへるより、文武全く二つになれり。  
（『鈴録』序）

つまり、文武はもともと一つであり、士たる者は両方を兼ねなければならぬはずであった。しかし、宋儒は文と武とを分けて考えていた。徂徠はそれを誤りとして指摘するのである。

これでわかるように、徂徠からすれば、文と武とは、車の両輪のような関係で、もともと一つのことであり、後世の学者は軍事を軽視し、文武を二つの道だと思っているのはなほだ間違っていることである。

だからこそ、彼は『鈴録』を著した。そして『鈴録』は分類上では、兵学書に属してはいるが、その中に、リアルタイムの政策意見もたくさん含まれている。一方、改革の意見書である『政談』も、かなり軍事的な問題について論じられていて、いわば表裏一体の関係である。前述の通り、二弁の成立後、徂徠の関心はすべていかにして天下を治めるのかに集中した。したがって、漢文に自負を持つ徂徠は、最晩年の作である『鈴録』を、漢文ではなく、和文で認めたのもそのためであろう。つまり、『鈴録』の作成目的は、日本に

おける「先王の道」の実践である以上、和文で書くのは当然のことである。

## 二、「先王の道」の根底に貫くもの——武士土着論

次の問題は、両著における根本的な問題意識は共通しているかどうか、つまり徂徠が何を狙っているのかである。結論から言うると、『政談』と『鈴録』とに共通する最大のキーワードは、武士土着論である。しかも、徂徠の武士土着論は、単なる武士たちを知行地に戻すことだけではない。平石氏は「徂徠にとって「土着」の問題がたんに治安・財政の再建に関わるのみならず、一層根本的に「聖人ノ道」がそこに依拠するとされる「敬天命鬼神」の宗教意識の培養にも、深く関わっていたことを示している<sup>(1)</sup>」と論じたが、それだけではない。

徂徠はそれにとどまらず、さらに広げた構想を展開した。すなわち、田制と兵制とに結びつけることによって、社会問題、経済問題、軍事問題などを一本化して解決しようとする、徂徠の社会構想の最大の特徴ともいえよう。

彼は先ず治国の根本についていう。

三代の古も異国の代々も又我が国の古も、治の根本は、菟角に人を地に付る様にする事、是治の根本也。

(『政談』巻之一、欠落・逐電のトりの事)

ここでは、武士だけではなく、すべての人を含まれる「人を地に付る」ことこそ、治国の根本であると主張した。そして、『鈴録』の冒頭部分では、次のように述べている。

兵賦ト云ハ、軍役ノコトナリ。軍役ノ割ヲ定ムルヲ制賦ト云。是建国ノ大制ニシテ軍法ノ根本ナリ。

(『鈴録』第一巻、制賦)

ここに「建国ノ大制」と「軍法ノ根本」とは、一致するものであることを主張していた。両著において徂徠は、武士土着論の原理を「三代の古」、「異国の代々」、「我が国の古」、すなわち、あとで取り上げる「和漢ノ古法」に求め、その上で、土着にすべき理由、その具体的な作用、技術的な手法を論じている。徂徠自身の言葉によれば、制賦ノ一卷ハ威南塘ガ兵法ニモナキコトナリ。又和軍ニモモトヨリ是ナキコトナレドモ、是軍法ノ大本ナルユヘ愚按ヲ以テ是ヲ述ス。

(『鈴録』第一巻、制賦)

つまり、これは徂徠のオリジナルともいえる。なぜ「制賦」は、かくも重要なのか。彼は孔子の言葉を引用している。

孔子ハ「千乗ノ国ヲシテ其ノ賦ヲ治メシムベシ」トノ玉ヘレバ兵賦ノ事ハ軍法ノ根本ナルコト明カナリ。

(『鈴録』第一巻、制賦)

徂徠にとって軍役とは、政治と軍事の根本が同じであることを証明する為の非常に重要な一環である。まずは技術的な操作について検討する。

徂徠は、前掲の「愚按」の次にこうことわった。

愚按トテモ和漢ノ古法ニ本ヅクコトナレバ、全ク杜撰ニ非ズ。

〔鈐録〕第一

オリジナルといえども、何もないところから創り上げることではない。「制賦」の方法として、彼が「和漢ノ古法」に基づいたことはわかる。それでは、この「和漢ノ古法」とは一体どういうものであり、現実的にはどう操作すればよいのであろうか。徂徠は、まず「三代」の例を挙げた。

三代兵賦ノ制(中略)一井ノ地ハ田地九百畝ナリ。一畝百歩ナリ。一步ハ八尺ナリ。周尺ハ今ノ曲尺ニテ七寸二分ニテ、八尺ハ五尺七寸六分。大抵一步ハ今ノ一坪ナレバ百畝ハ三町、一井ノ田地二十七町。然レバ方百里ノ田地ハ二十七万町。此方ノ升目ニシテ大抵一町十石ト積リテ一井ノ石高二百七十石ナレバ(中略)二万夫ノ家ヨリ出ル兵賦、一軍ノ人数一万二千五百人。右ノ方百里・方七十里・方五十里ト云モ大概ノ数ニテ、大抵田地六町二軍兵一人出ス割ナリ。

〔鈐録〕第一卷、制賦)

ここではつきりすることは、徂徠が井田制を基づいて兵賦を制定すべきだと考えていたことである。これに続いて、徂徠は井田制に基づき、「軍役ノ割」を細かく計算し、その結果は、

日本国総知行高二千万石ヨリ右ノ軍役ヲ出ストキ、三十三万騎ノ数ニツマル。又古来ノ詞ニ「六貫一匹」ト云モ田地六十石目ニ一騎ト軍役ヲ懸ルコトニテ、異国日本ノ古法ニ符合ス。是ヲ

軍法ノ定法ト知ルベキナリ。

〔鈐録〕第一卷、制賦)

総高二千万石から出せる兵は「三十三万」ということになる。『政談』も『鈐録』のような具体的な計算は挙げてないが、明らかに同じ計算に基づいての議論が見られる。

元来軍役といふは、譜代の家来を其主人と同く備立に列する事なるを知らぬは、世間に譜代絶て出替奉公人斗になり(中略)又騎馬といふは当時は皆主人の数斗なれば、日本國中物高二千石して、日本の武者の惣数三万余騎也。古は日本の物軍兵三十三万騎と云たるには十分の一に成たり。

〔政談〕卷之一、譜代者の事)

要するに、軍役は石高と対応するものであって、武士たちはそれぞれの譜代を連れて戦場に赴くのであるから、その譜代たちも戦力に入れて計算すべきものである。しかし、徂徠からすれば、当時のやりの軍学はそう考えたわけではなかった。

物前ニナレバ皆馬ヨリ下立テ歩立トナルトキハ、右ノ歩兵ノ法ニテ主人ヲ火長ト見テ陪卒ハ歩兵ナリ。コノ歩兵モ主人ト一面ニ備ヘ戦フベキコトナリ。又陪卒ノ内弓・鉄砲ニ長ズル輩ヲ拔出シテ別ニ頭ヲ付テ足軽ニ用タリト見エタリ。是ニヨリテ知行高二応ジテ陪卒ノ数ヲ定メ、是ヲ軍役ト云モ戦ニ用ル故ナリ。而ルニ近來誤テ陪卒ニハ具足箱・草履・挟箱・鍮ナドヲ持セ、是ヲ使令ノ役ニ供シテ戦士ノ列トセザルユヘ、軍ノ時ハ無用ノ人ニ兵糧ヲ費サレ、且又武士ヲ城下ニ聚ルユヘ、百姓ノ外二別

二武士ノ家来ト云モノ出来シテ一枚ノ手形ヲ便リトシテ太平ノ法度ヲ以テシバリ置故、軍役ノ名ニ背キ戦士ノ数減少スルコト不吟味ノ至リナリ。

〔鈐録〕第一卷、制賦）

さらに、『鈐録』のみならず、『政談』もこの問題を取り上げた。元来軍役といふは、譜代の家来を身上相応に持事なる故、譜代の事を部曲といひたる也。然るに今は譜代の家来といふ者一人も無之世界に成り、出替り者さへ持がたければ、精を出して出替者をたくさんに置いてはめくを軍役の嗜よきと覚ゆる也。

（中略）当時の軍法者の備立を見れば、主人主人斗を一面に備させ、各鎧一本の役とし、家来をば其跡に備へて胴勢と号す。

されば五十騎一備の内には、二百石取も有、三四百石取も有、乃至千石取も有を、肝心の時は鎧皆一本の役とし、歩立になれば、歩侍五十人持ちたると何の替りもなし。然れば高知を侍にくるるは何の為なるぞ。

〔政談〕卷之一、譜代者の事）

徂徠の危機意識は、陪卒たちが単なる荷物持ちのような存在になった理由は、譜代そのものの存在が消え失せ、「一枚ノ手形」によって雇った出替り者に取り替えるに至ったことにある。いくら石高を有しても、戦場において「鎧一本の役」しか立てられないのは、譜代が消えてなくなった結果だと、徂徠は主張している。そうすれば、彼が「然れば高知を侍にくるるは何の為なるぞ」と批判したように、石高制ひいては封建制の意味がなくなり、システム自体がもはや機能していないのである。

しかし、譜代が消えた理由は、すべて武士が「御城下に集ま」っていたため、「旅宿の境界」にならざるを得ないことが原因である。だからこそ、『政談』も『鈐録』もこの問題について力説したのも、おのずと頷ける。両著からほぼ同じ議論が見られるので、併せて掲げる。

武家を知行所に置ざれば、しまりの至極に非ず。そのみならず、武道を再興し、世界の奢を静め、武家の貧窮を救ふ仕形、此外更に有べからず。先第一、武家御城下に聚居るは旅宿也。

諸大名の家来も其城下に居るを、江戸に対して在所といへ共、是又己が知行所に非ざれば旅宿也。其子細は、衣食住を初め著一本も買調ねばならぬ故旅宿なり。故に武家を御城下に差置時は、一年の知行米を売り払ふてそれにて物を買ひ調へ、一年中に使切る故、精を出して上へする奉公は、皆御城下の町人の為になる也。是によりて御城下の町人盛になりて、世界次第に悪敷なり、物の値段次第に高直に成て、武家の困窮當時に至りては、もはや可為様なく成たり。

〔政談〕卷之一、武家、旅宿の境界を改むる事）

諸大名御城下ニ居住スルトキハ、何レモ皆旅宿ノ境界ナルユヘ衣食住一切ノコト皆金銀ニテ買調ルコトナレバ、領地ノ年貢ヲ沽却シテ金銀ニシテ御城下へ持來リ使フナリ。是ニヨリ商人諸職人御城下ニ聚ツドヒテ其自由ナルコト甚シキ故、奢侈日々ニ

長ジ、就中婦女ノ奢以ノ外ニ超上ス。此上ニ公儀ヨリ不時ノ公用ヲ懸ラル、ユヘ、世移リ風俗末ニナルニ随テ其費用ノ程限量ヲナシ難ケレバ、一定ノ割曾テアルマジキナリ。土着ノ古ニ返ルトキハ衣食住共ニ其領地ニテ事足コトナリ。

〔『鈴録』第一卷、制賦〕

「旅宿の境界」とは、徂徠独自の語彙で旅する境遇に譬えて、簡単にいえば、武士たちが貨幣経済に依存していることを指す。

ここに幕府経済の構造上の問題が絡んでいる。<sup>12)</sup> 武士たちが城下に集まれば、その膨大な需要量のために、サービス業などを提供する町人たちも集まってくる。人口が増えるにつれ新たな需要を引き起こし、江戸は巨大な消費都市と発展していく。しかし城下の活気は武士たちにとって逆に困ったことになる。景気の拡大はインフレを招く、物価は上昇する。一方石高制の下で、経済活動のうち、「消費」にしかかかわらない武士にとって好景気は自分たちに何の関係もないものだが、インフレによる物価上昇の影響は受けている。さらに町の奢侈という「風俗」によって、武士の経済環境の悪化は一層拍車をかけられた。これでは譜代を抱えたくてもしょうがない。

ちなみに、「旅宿の境界」という言葉が両書とも出てきただけでなく、もう一つ指摘したいことは、文面上『政談』と『鈴録』のいずれも軍役のことを論じたあと、すぐに旅宿の境界について論じている、という配列になっていることである。これは、この二つの著作はほぼ同じ関心の方向を持つことを示しているのではないかと思

われる。

また、徂徠にとって「旅宿の境界」は武士に経済問題をもたらしただけでなく、軍事的にも兵力の動員のみならず、武士の本来あるべき姿にもかかわっている。

畢竟武士ノ本ハ農民ナリ、武士ノ所作ハ弓馬トモニ土ノ上ノワザナリ、ト云コトヲ忘ル、トキハ武道日ニ衰フルナリト知ルベシ。

〔『鈴録』第一卷、制賦〕

武士は土地から離れてはいけない理由として、武士のすべてが「土ノ上ノワザ」だからである。これは抽象的な議論ではなく、現実的に「弓馬」、つまり武士たちの戦士としての能力を直接関係することである。馬術についての例を挙げてみよう。これもまた両方ともみられる。

男も野広く方々かけありけば、手足も丈夫に成べし。親類近付の方へ咄にありき、用事あれば五里三里は常にありき、馬もをのずから達者に成べし。

〔『政談』卷之一、武家、旅宿の境界を改むる事〕

武士土着スルトキハ（中略）親戚朋友ノ訪問ニハ五里六里乃至十里二十里ヲモ常ニ往還スルユヘ、馬ニ騎習レテ自然ト馬達者ニモナリ。

〔『鈴録』第一卷、制賦〕

『鈴録』において、徂徠は威継光の兵を選ぶ基準、つまり「郷野老実ノ人」（『鈴録』第三卷、職制并選兵）を優先して選ぶこと、また

「城市油滑ノ人ヲ嫌」（同前）うことを取り入れ、しかも「畢竟武士ノ本ハ農民ナリ」とまで言い切ったのである。農民に戻れば自ずと馬術に長け、体も丈夫になり、さらには、おのずから「郷野老実ノ人」という基準にも適うのである。すなわち、武士の戦士としての機能を維持するためにも、土着をさせなければならぬことである。

以上の議論を踏まえると、一つの結論にたどりつくことができる。それは、この二つの書物が同じ問題意識を持っている、ということである。だとすれば、徂徠は「老眼・悪筆」の体、しかも幕命を受けている忙しい時期にもかかわらず、『鈴録』を作成していたのは、両著は同じ目的、つまり幕政改革のために著したものである以外には考えられないのである。幕政改革に関して、政治改革もさることながら、軍制に関する構想も徂徠の視野に含まれていたことは間違いない。そして、両者の最大の共通点は武士土着論である。

### 三、なぜ『鈴録』を献上しなかったのか

しかし、先にも述べたように、徂徠自身による『鈴録』の序文の日付は『政談』献上とほぼ時期が重なっている故、『政談』を献上した時は『鈴録』もすでに完成されていたはずだ。ならばなぜ『鈴録』を『政談』と一緒に献上していないのか。また、『鈴録』の文面を見ても、明らかに『政談』と違って、最初から吉宗に見せるた

めに書いたわけではないことが分かる。

その理由は、徂徠本人の心境に関係があると考えられる。その変化を如実に示したエピソードがである。

徂徠今ノ大御所（割註、有徳公）紀州ヨリ入ラセラレシ御時云レケルハ、中興此時ナリ。間部越前守ニ腹切ラセ、国初功臣ノ諸王侯ノ衰タルニ、御加恩成サレ御取立候テ、民ノ耳目ヲ新ニ成サレズバ、次第々々ニ衰ヘ行クベシト云レタリ。其後一年アマリスギテ、吾云如ク成サラレズ。サテく中興氣象ナシトナゲキテ、春台ニ語レト也。<sup>(13)</sup>

吉宗に対し、徂徠はかなりの期待をもっていたらしい。しかし時のたつにつれ、その期待も「中興此時ナリ」から「サテく中興氣象ナシ」に変化したのである。さらに『太平策』には、次の一節がある。

開国ノ時ニ立ヌ制度ヲ、中頃ニ至テ立替ンニハ、此二ツノ慮アルベシ。茂卿ガ愚存ニハ、嚴廟ノ末、憲廟ノ初ヲ、ヨキ時節ノ至極トス。ソレヨリモハヤ三四十年過テ、世界ノ困窮ヨホドツヨク、高位ノ人ニ愚庸多ケレバ、モハヤナリガタク思ヒ侍ル。然レドモ世界ノ困窮ヲ救フ道外ニナク侍ルユヘ、右ノ在安民在知人ト云ル二句ヲヨク愛用シテ、下ナラシヲシテ見タランニハ、今二十年バカリマデノ間ハナルベキコトナリ。（『太平策』）

この「嚴廟ノ末、憲廟ノ初」という言葉を見ても、徂徠は吉宗にある程度の見切りをつけたのではないかと考えられる。その理由につ

いて、徂徠が『政談』の中で仄めかしていた。

国にトリを付る事、大概右の条々に尽くせり。され共畢竟の所  
 武家を知行所に置ざれば、しまりの至極に非ず。そのみなら  
 ず、武道を再興し、世界の奢を静め、武家の貧窮を救ふ仕形、  
 此外更に有べからず。

〔『政談』巻之一、武家、旅宿の境界を改むる事〕

この一箇所だけではなく、『政談』において、徂徠は何度も土着を  
 実現しなければ、改革も結局はその場の凌ぎにしかないような  
 ことを吉宗に力説した。実際に享保の改革だけでなく、寛政の改革  
 もかなり徂徠の『政談』と親和性を持つてはいるが、肝心の制度と  
 しての武士土着は、結局のところ幕末になっても幕府は本格的に取  
 り掛からなかった。しかし、小手先の改革をいくら行っている、  
 武士を土着させない限り、根本的な解決にはなれない。そして、『鈴  
 録』の前提はまさにこの武士土着論の上にあるから、徂徠はそれを  
 現時点では実現しえないと見限った故、敢えて献上しなかったのだ  
 はないかと推測することができる。そして実際、徂徠が没した翌年  
 の享保十四年（一七二九）、吉宗が『鈴録』を徂徠の養嗣子である  
 获生金谷に命じて献上させた<sup>14</sup>あとでも、この著作は『政談』と違っ  
 て、『鈴録』の意見は何一つ幕府に取り入れられなかったのである。

#### 四、『政談』と『鈴録』——その構想と危機意識

本稿の最後に、極めて現実主義的な立場に立っていた徂徠学が、  
 この両著で構築した「先王の道」への実践ともいべき社会構想は  
 一体何を問題視していたのか、つまり本稿の副題である徂徠の危機  
 意識の切実性について検討したい。

前掲の武士たちの経済問題についての議論は数多くあるが、その  
 際クローズアップされているのは、大抵は商品経済の発展に対する  
 支配階級の逆行としての武士土着論である。しかし焦点とすべき問  
 題、すなわち、なぜ貨幣経済に依存してはいけないか、そしてなぜ  
 武士階級が必要なのかについては、あまり注目されていないよう  
 である。

武士土着論に関しては、徂徠の独創ではない。早くも熊沢蕃山に  
 よって指摘され、幕末では会沢正志斎などがある。熊沢蕃山は『大  
 学或問』の中で、徂徠ほど「武士ノ本ハ農民ナリ」とまでは言い切っ  
 ていないが、主旨はほぼ同じである。

農兵とならば、日本の武勇格別つよく、真の武国の名に叶ふべ  
 し。武士農を別れてよりこのかた、身病氣に手足弱く成ぬ。心  
 ばかりはいさむとも、敵にもあはで疲るべく、病死すべし。其  
 上若党・小者共も一年居にて主をおもはず。是は軍用の損なり。  
 平生も農兵ならざれば風俗あしく成て長久ならず。農兵の昔に

返すべきは此時なり。<sup>(15)</sup>

農兵の昔に戻らなければ、戦士としての武士が成り立たないという考え方は徂徠に継承されたとみて間違いなからう。当時の国際情勢では、外敵の脅威を想定せざるを得ないだから、蕃山はかなり関心を持っていると思われる。

今北狄来りなば、彼と合戦までに及ばず、内虚にして人心散ずる事あらん。今の諸侯一国の人数を出して、其兵糧あらん事は、二十侯に一二侯もまねなるべし。<sup>(16)</sup>

蕃山の仮想敵、つまり「北狄」はもちろん女真族が立てた清の国であるが、ここに蕃山の取り上げた問題は経済問題ではなく、国防の問題である。城下に集められた武士が知行米を換金し、貨幣経済に依存するという現状では、緊急事態に対応できないことを問題視している。「人数」つまり戦士としての譜代の減少以外に、「兵糧」つまり米のことも問題だと、蕃山は見ている。そして、徂徠の問題意識も蕃山と共通していることは明らかである。

此上に御領・私領共に、年貢米をむさと売払はず、蔵を立て込置べし。(中略)又大飢饉の節、民を救ふ事もなる也。又一揆・兵乱も有之共、兵糧の手遣に事欠事なし。

(『政談』巻之二、武家米を貯る仕形の事)

ただ蕃山と違って、徂徠の懸念は外敵の侵入以前に、緊急事態に遭遇した場合、国内の食糧供給がまず追いつかなくなることにある。

当時御城下に数百万の人を集め置き、諸国の米を悉く御城下へ

運び来りて食費す。当分は賑かに繁昌に見へて目出度事なれ共、奥筋に事あらば仙台の米は入まじ。西国に事あらば上方の米は入まじ。其時は御城下の民、食にかつて騒立んは、何と静ても静がたかるべし。飢に逼りては何事をせんも斗がたし。七年の疾に三年の艾といふ事有。其時に至りては、せんかた更に有まじき也。諸大名の米も皆商人に売渡したれば、諸国にても其時は難儀甚しかるべし。是等の事も世の末に成ては必無之事に非ず。

(『政談』巻之一、戸籍の事)

蕃山と違って、徂徠の時代に北狄の問題はすでになくなり、西洋の脅威はまだ現れていない。しかし、「七年の疾に三年の艾」という言葉通り、まさにその太平のさなかであるからこそ、油断してはいけない、普段から用意しないといけないことを、彼が主張している。そして、彼の歿後間もない享保十七年、西国大凶作により江戸の米価も大暴騰、翌年に江戸では「打ちこわし」が発生し、徂徠の予想は的中してしまった。

事実、徂徠の言った通り、非常事態は必ず発生する。だからこそ、政治問題をすべて経済にのみ還元することは無理がある。さらに、彼の貨幣経済に対する不信もここに由来すると考えられる。その理由について次のように述べている。

今時のをろか成軍者は、金をたむるを軍用といふ。左様の時は米払底に成故、何程金有ても土石を貯へたることく、何の用にまたたぬ事也。(『政談』巻之二、武家米を貯る仕形の事)

彼からしてみれば、緊急時では、貨幣は何の役にも立たないのである。

そもそも貨幣経済なるものとは、人間の歴史の中ではかなり後から登場した「特異なシステム」<sup>(17)</sup>ともいえるものであつて、それへの移行を近代化の尺度として固定化するのではない視点から、徂徠の武士土着論を再考する必要がある。また経済が社会に従属していた当時の状況にそくしての考察もなされなければなるまい。

また一方では、武士土着が国家統治システムを維持するために必要不可欠な理由のもう一つは、経済的なものである。資本主義が発達する以前、自らの財政基盤を持たない現代的な官僚システムを維持することは、当時の経済規模では到底できないことである。<sup>(18)</sup>他方では、軍事組織も同じように、生産性の持たない軍隊を平時でも大量に維持しようとすれば、財政破綻は免れない。ヨーロッパでも、三十年戦争を境目に、マスケット銃の装備投入により騎士階級は解体し始めたといわれているが、その代わりに傭兵が発達した。国民皆兵のような徴兵制は、どうしても近代国民国家の登場をまたなければならなかったのである。中国の宋代では、近代的な官僚制度と国家常備軍に近いシステムを採用したが、その結果、「冗官」と「冗兵」の問題は常に宋代の国家財政に付きまといつてしまつたのである。

以上簡単にまとめると、当時では、社会を維持するための食糧供給問題もさることながら、国家統治システムにとつても、二つの要

素をあわせ持つ人たちの存在は、必要不可欠である。すなわち、一つは、自らの財政基盤を持ち、平時では政治的なことと生産的なこととに携わること、もう一つは、有事にも備えていて、一旦緩急あれば、直ちに動員することができることである。したがつて、『政談』と『鈴録』、広く言えば、武士土着論は、当時の社会システムにおけるその人たちを再び機能させるための、切実な改革プランと言えよう。

### おわりに

以上では、『政談』と『鈴録』とを中心に、徂徠の社会構想、特に武士土着論を検討してきた。まずこの両著は同じ時期に執筆されたことは、その問題意識や内容からしてみれば、ほぼ間違いない。ただ両方とも、いずれも和文ではあるが、『政談』は言葉遣いからも、將軍に見せる意識がわかる。それに対して、『鈴録』の言葉遣いは異なつていたので、おそらく最初から吉宗に直接献上するつもりはなかつたと思われる。それにしても、最晩年の時『政談』を書きながらも和文で兵学書の『鈴録』を作り上げたこと自体がすでに興味深いことである。それだけこの書に重大な意義があることを示しているのではないだろうか。湯浅常山は『文会雜記』の中で松崎観海の伝えを記している。

徂徠晩年二言ハレシハ、国脉チゞマリタリト覚ユ。其後病中二

云レシハ、国脈大ニチヅマリ程ナク甲冑ノ入コトアルベシ、ト云ハレシ由、君修語レリ。<sup>19)</sup>

『政談』とともに『鈴録』を著した一つの理由は、間もなく乱がおこると徂徠は予想していたからではなからうか。

しかし、儒者として多くの兵学書を残した数少ない学者の一人である彼は、それ以前にすでに文武二分ではないという考え方を固めた。そして、儒学と兵学との両方に研鑽を深めるにつれ、ついに「先王の道」の実践はかくあるべしと確信に至ったのではなからうか。たとえば『徂徠先生答問書』には、次の一節がある。

古は士皆采邑に居住候を。いつの比よりか城下に聚置候故。武士皆公家に成申候。城下は旅宿なる故物入多く。勝手次第に不如意に罷成候。

このように、『徂徠先生答問書』では、「旅宿」は出てくるが、「土着」は出てこなかった。おそらく最晩年の考えであろう。

封建制の下で、「制度」を立てるためには、まず土着を実現しなければ何も始まらない。それは単に武士たちの経済問題のみならず、戦士としての能力、軍隊としての機能、緊急事態に対応するための準備、さらに社会の「風俗」、先祖に対する祭祀など、すべてにおいてである。

現在に生きる我々は、当時の人々の考え方を理解する際、最大の支障となるのは現在の常識にとらわれることである。時代背景を知るだけでは不十分であって、むしろ現代的視点をもとにすることに

より逆に誤った認識をもたらす可能性すらある。結果から逆算することの問題がここにある。徂徠の時代は基本的に平和の時代であったという歴史的结果を知っている我々は、当時の人々の心境や危機感覚を実感することはできないであろう。だからこそ、我々は蕃山や徂徠の主張を取り違いがちなのだ。

蕃山から徂徠、そして藤田東湖や会沢正志斎など、幕政にしろ、藩制にしろ、実際の政務に携わった学者たちが口をそろって土着を唱えるのは、やはり偶然ではない。しかし、このことを確言するには、これらの人たちの思想を比較し、分析することを待たねばならない。これは本稿の主旨から逸するため、次の機会に譲る。

#### 注

- (1) 主に『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二）を参照。
- (2) 片岡龍「荻生徂徠の初期兵学書について」（『東洋の思想と宗教』第一五号、一九九八。所収）にはこういう、「以後死に至るまでの十年間の徂徠の著作活動においては、『鈴録』『射書類聚和解』『広象棋譜』等の兵学、『楽制篇』『楽律考』等の音楽、『絶句解』『唐後詩』『四家集』等の文学などの専門的分野に関する教科書、入門書の編述が目立つのであり、これらが「先王の四術（『詩書礼学』『六芸』『曲芸』）を意識するものであることは言を俟たない。」
- (3) 松村宏「荻生徂徠『政談』考」（『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学 思想史篇（一）』一九九〇。所収）。
- (4) 『政談』に関する研究は多数あるが、注に引用した先行研究のほか、本稿は主に以下の所論を参考した。辻達也「『政談』の社会的背景」（荻生徂徠『日本思想史大系36、岩波書店、一九七三』。辻達也『政談』解説（岩

波文庫、一九八七)。塚本学「江戸における中央と地方」(『思想』七二六、岩波書店、一九八四)。中村春作「古文辭學」から『政談』へ(『中國古典研究』第三十二號、中國古典研究会、一九八七)。

(5) 『鈴録』に関する先行研究は、主に引用したほか、主に以下の所論を参考した。片岡龍「荻生徂徠の「道」観と朱子学時代の仁斎批判」(『早稲田大学文学研究科紀要』別冊、哲学・史学編、一九九四。所収。前田勉「近世日本の儒学と兵学」(ベリかん社、一九九六)。前田勉氏「兵学と朱子学・蘭学・国学」(平凡社、二〇〇六)。野口武彦「江戸の兵学思想」(中央公論新社、一九九九)。

(6) 吉岡孝「荻生徂徠『政談』の構想と社会的実践の可能性」(『國學院雜誌』第一一二卷、第四號、二〇一一。所収)。

(7) 平石直昭「荻生徂徠年譜考」、一六一頁。(平凡社、一九八四)。

(8) 同右、一六〇頁。

(9) 子安宣邦「『事件』としての徂徠学」。第八章、二七〇頁。(青土社、ちくま学芸文庫、一九九〇年)。

(10) 「春秋穀梁傳」昭公八年「蒐狩に因りて武を習ふは、禮に事ふるの大なる者なり」(因蒐狩以習武、事禮之大者也)。

(11) 平石直昭「荻生徂徠年譜考」、二五二頁。平石氏は「徂徠集」の安積澹泊宛て第五書の「士人雖有采邑而不居、皆館于城中、屋舍猥陋、百事苟且、冗迫無暇日、齎且不能、況祭薦乎、尚何問主牌異同乎」という一節を引用しながら、次のように分析していた。「すなわち武士の城下町住居が祖先に対する崇敬の念をも薄れさせているというわけである。年譜後段が示すようにあたかも「政談」は享保十一年を中心として執筆された。その巻一、二において武士土着論が展開されているのは周知の通りである。そして右のような第五書がその年暮頃に書かれていることは、徂徠にとって「土着」の問題がたんに治安・財政の再建に関わるのみならず、一層根本的に「聖人ノ道」がそこに依拠するとされる「敬天命鬼神」の宗教意識の培養にも、深く関わっていたことを示している」。

(12) 本稿では、武士の城下集中による問題点のみを指摘する。幕藩制経済全体に関しては、主に『日本経済史の新しい方法』(コウゾウ・ヤマムラ著、新保博/神木哲男 監訳、ミネルヴァ書房一九七六)『日本経済史・幕藩体制の経済構造』(岡光夫、山崎隆三編著、ミネルヴァ書房、一九八三)、『日本経済史・近世・現代』(杉山伸也、岩波書店、二〇一二)を参照。

(13) 『文会雜記』卷之一下、二一九頁。(『日本隨筆大成』第一期14、吉川弘文館、一九七五)。

(14) 「荻生徂徠全集」六、解題。六七二頁(河出書房新社、一九七三)。

(15) 熊沢蕃山「大学或問」十二、四四三頁。(『熊沢蕃山』日本思想大系38、岩波書店、一九七二)。

(16) 同右、四二五頁。

(17) カール・ポラニー「新訳」大転換―市場社会の形成と崩壊―(野口建彦・栖原学 訳、東洋経済新報社、二〇〇九)。一一八頁、訳者による梗概。「重商主義段階にいたるまで、市場が存在したとしても、それは経済システムの付属物にすぎず、経済システムは社会システムの中に吸収されており、経済機能は社会的秩序の一機能に過ぎなかった。一般に経済システムは社会システムのうち埋没していた」。

(18) I・ウォーラスティン「近代世界システムI」(川北稔訳、岩波モダンクラシックス、一九八二)二〇一頁。「商業発展と農業資本主義の発達がなければ、国家官僚機構の拡大を支える財政基盤は確立すべくならなかったであろう」

(19) 同前、二〇五頁。